

そしてこの四月からはトロント本願寺にて勤務し、こちらでも沢山の方々の支えがあつて、今の念仏生活があります。

最後にこの念仏生活の中で私が大切にしている親鸞聖人のお心をうかがえる言葉を紹介いたします。

専修念仏のともがらの、わが弟子、ひとの弟子といふ相論の候ふらんこと、もつてのほかの子細なり。

親鸞は弟子一人ももたず候ふ。

「歎異抄」第六条『註釈版聖典』八三五頁

親鸞聖人が弟子を一人も持たないと言つた理由は、「あらゆる者は私自身のはたらきによって念仏するのではなく、阿弥陀如来の力によって念仏するから」です。阿弥陀如来のはたらきによって念仏申す者はすべて仏の弟子になるので、親鸞聖人にとっては師弟の上下関係はなく、みな仏弟子として同等の「同朋・同行」であるということです。

浄土真宗の教えの中では、僧侶と門信徒という立場の違いはあれども、みな同じ阿弥陀仏のはたらきによって念仏する仲間であります。私自身も僧侶としての研鑽を積んでいきたいと思つていますが、決して門信徒の方々に教えを教えるというような意識ではなく、ご一緒に教えを讃嘆する仲間同士という関係を築き上げていきたいと思ひます。そして西本願寺がそうであるように、阿弥陀さまが中心、お念仏を生活の中心にする人々の集う場として、トロント本願寺があり続けられたいと思ひます。

南無阿弥陀仏

トロント本願寺 駐在僧侶

橋本 顕正

枕経について

ご家族の枕経を検討されている場合は、事前に当寺院の事務所へご連絡いただくようお願いしております。

ご希望の時間を調整し、亡くなられる前であれば、ご一緒に臨終の仏徳讃嘆のお勤めを、亡くなられた後であれば、故人を偲びながら、ご家族の皆さんと仏徳讃嘆のお勤めをさせていただきます。

当寺院に事前にご連絡いただくことによつて、ご家族の質問への対応や必要な情報を提供することが可能となります。

枕経についての連絡、質問については、
(416) 534-4302

あるいは、ttbc@ttbc.on.ca (まじ) 連絡いただけます。

留守の場合はメッセージを残していただき、担当者が折り返し対応させていただきます。

トロント本願寺 理事会

祥月法要のお知らせ

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に会い、阿弥陀さまの仏徳を讃嘆し、報謝の思いでお勤めする法要です。

日時：9月8日（英語：午前十一時から）

（日本語：午後一時から）

※九月は第一日曜日ではなく、第二日曜日が祥月法要となりますので、お気を付けください。

場所：トロント本願寺

※英語法要のみZoom配信をさせていただきます。

Zoomでの参拝を希望される方は、その旨をttbc@ttbc.on.caまでお知らせください。寺院事務所からZoom Linkを送らせていただきます。

故人が祥月でない方もご遠慮なくご参拝下さい。



佛心

二〇二四年九月号

浄土真宗 本願寺派

トロント本願寺

そして開教使になるために、得度に続いて取らなければいけないのが教師（きょうし）という資格です。この資格は僧侶が日本の寺院において住職になるために必須の基礎資格となります。

得度の研修で学んだことに加えて、法話の実演などが、こちらも約十日間の研修で行われ、『一般僧侶の範となり得る者』にこの資格が与えられます。

また、この教師資格を取ることによって、法話に特化した布教使（ふきょうし）資格や勤式に特化した特別法務員（とくべつほうむいん）資格など僧侶の中でも専門性を有する資格を得ることができるようになります。現在、僧侶全体の約六割の僧侶がこの教師資格を取得しております。ちなみに私は二〇二二年に教師資格を取得しました。そして龍谷大学の大学院にて法話に関する指導を受けて、二〇二四年三月に法話の試験に合格し、布教使資格を取得しております。

この教師資格を有する僧侶で、海外寺院にて活動する意欲のある者が受講するのが今回の開教使（かいきょうし）研修です。厳密にいうと開教使というものは資格ではありません。国際伝道に関する研修を修了し、任命され海外地域に派遣される僧侶を開教使と呼びます。この研修を受講するための応募要件は以下の三つです。

(1) 浄土真宗本願寺派の国際伝道について特に熱意を有する教師

(2) 講義を英語で受講できる語学力を有する

者（英検準1級程度推奨）

(3) 年齢は原則として四十歳までとする

このような要件において私の開教使になるための高い壁となったのは英語でした。英語を母語とする人にとつては、わかりにくいかと思いますが、英検準1級のレベルは「社会生活で求められる英語を十分理解し、また使用することが出来る」レベルであります。日本の中学校で英語の先生をしている人でも約4割しかこのレベルに達していないと言われています。一九八〇年代に私の父が開教使だった時は、英語は海外に派遣されてから学べばよかつたそうですが、二〇二四年現在、開教使になるためには日本人にとつてはかなりの高い英語力が求められているといえます。

私は特にスピーキングはまだですが、カムループスでの留学によって、なんとかこのレベルに達することができ研修を受講することが出来ています。そして開教使になるためのステップも残すところは十月からの米国のカルフォルニア・バークレーにある浄土真宗センターでの International Ministerial Orientation Program <IMOP>の二か月間の研修のみとなりました。

私は二〇一九年に海外にて浄土真宗の僧侶として活動したいという思いを持ち、それから約五年経ちました。龍谷大学の大学院では、素晴らしい先生方との出会いがあり、浄土真宗の教えを学び、留学していたカムループスでは、お寺のメンバーの何名かは、本当は日本語が理解できるのにもかかわらず私の英語力向上のために、数か月もの間英語しかわからないふりをしてくれました。

2 ページに続く



開教使までの道のり

四月からトロント本願寺に駐在している橋本顕正です。

開教使になるための研修のために帰国し、現在、日本から今月号の記事を書いております。七月末にはトロントからオンラインで約一週間の研修を受講し、今回は本山である西本願寺にて、二日間研修を受講しました。京都は四十度近い暑さで命の危険を感じるほどの暑さでした。

カナダにいとたびたび、私たちの宗派、浄土真宗本願寺派における開教使と教師の違いを聞かれますので、今回は自分の経歴を入れつつ日本人が開教使になるためのステップを記しておきます。

私たちの宗派では、僧侶になることを得度（とくど）といいます。約十日間の研修を経て、頭を剃髪し得度式に参加し、度牒（どちよう）というを免許を受け正式に浄土真宗本願寺派の僧侶となります。この得度によって僧侶としての生活がスタートします。私たちの宗派には現在約三万人の僧侶が在籍しております。私は二〇一九年の十月に得度し、僧侶となりました。